

# ソーシャル活動につながるインセンティブの検討

齊藤 ゆか／寺嶋 正尚／中島 さえ

## 1. はじめに

ソーシャル活動 (social activity) は社会的活動を指す。類語にはソーシャル・アクション、ソーシャル・ワーク、ソーシャル・ビジネスなどがあり、その含意は広い。非営利活動に限定すれば、社会貢献活動、地域貢献活動、ボランティア活動などが挙げられる。近年は、大学と地域社会をつなぐ教育実践として、サービス・ラーニング (Service-Learning)、地域連携学習 (Community-Based Learning = CBL)、問題解決型学習 (Problem-based Learning = PBL、Challenge Based Learning = CBL) など、ソーシャル活動が大学教育に導入されて久しい。

筆者らは、地域や自治体・企業など社会との交流を導入した体験型・課題解決型学習などソーシャルな教育や研究を行ってきた。両者は異なる専門性を有しているが、地域社会をフィールドにして、学生の実践的能力を育むソーシャル教育の展開をしてきた共通点がある。齊藤は生涯教育学の視点から、社会参画型教育やボランティア評価研究を行ってきた。「ボランティア活動を通じて、人は成長するのか」の問いを設定し、人間が発展・変容するプロセスに着目し、その活動成果を可視化する試みを行ってきた (齊藤2022)。寺嶋はマーケティングの視点から、商店街活性化やまちづくり方策の調査研究を行ってきた。商店街の活性化に関する研究では、東京都内の主要都市の来街者に対して街頭インタビュー調査を行い、利用目的や訪れる頻度などにどのような変化が起こっているか定点観測してきた (寺嶋ら2019)。

このように、ソーシャルな教育・研究の原動力は現場にあり、与えられた条件や環境の中で、新しい学びを創作的・流動的に開発を行ってきた。そこで本研究は、大学と地域・社会をつなぐ教育支援手法の開発と評価構造を解明するため、その一歩として、ソーシャル活動につながるインセンティブの検討を行う。本稿ではマーケティング手法を用いて、学生主体で展開したCBL (地域連携学習) 事例として、学生参画型交流事業「かながわユースフォーラム」の分析を試みる。

## 2. ソーシャル活動のインセンティブに関する先行研究

「インセンティブ (incentive)」とは、「刺激・誘因・動機・報奨」を意味する。経済学では、コストと利益を考えあわせた際に、人の行動を変化させる「誘因」を表す。心理学

では、「行動が生起するため外的条件」と定義される。つまり、インセンティブは、個人の意欲や引き出し、行動を起こさせるための外的刺激や動機づけを表す。

インセンティブ付与によって、参加が促されるという研究成果がある。公衆衛生分野では、重要課題である健康づくりにおいて、身体活動や運動イベントの参加促進に、インセンティブが活用されている。松下ら (2017) は、「身体活動の促進効果はインセンティブの種類によって異なる」という仮説をもとに、コンジョイント分析を行った。その結果、「介入プログラムへの参加という段階では、金額が高いほど効果的」である、とした。また動機づけ効果は、「インセンティブプログラムの期間が短い」や、身体活動量の記録方法など「参加自身の負担が少ない」ほど高い結果となった。また、千々木ら (2023) は、「金銭的インセンティブが住民の運動実施や継続に有効」であり、海外では「高額かつ現金・商品券といった金銭的インセンティブを交換している研究」が多いことから、金銭的インセンティブ（全国商品券、地域商品券、共通ポイント）の種類別の分析を行った。9,590人対象の調査では、「非金銭的インセンティブより金銭的インセンティブ」や「地域商品券」を選好する者の割合が高い結果が導き出された。今後は、「地域活性化効果を生み出す仕組み」を加味した実験や、性別・年齢・学歴・就労など属性別による選好するインセンティブの種類の相違を解明する必要性を述べた。岡本 (2017) らの、インセンティブ付き事業の「脱落しやすい者の特性」を明らかにした研究も興味深い。

一方、地域活動にかかわるインセンティブ研究がある。唐崎ら (2009) は、農業・農村参加活動事例に対する参与観察型の調査をもとに、「活動関係者の参加モチベーションとインセンティブ」研究を行った。活動の関係者を「運営者」「来訪者」「協力者」に分類し、相互のインセンティブの模式化は、持続可能な活動設計につながると共に、関係性を強めるインセンティブの創出に有用である、とした。また伊藤・市村 (2017) は、「行政のインセンティブ付与」に着目した都市公園の地域課題解決や共助社会形成への研究を行った。住民参加型の公園の維持管理活動のインセンティブ付与には、「金銭の付与」「物品の提供」等の採用が高い傾向にある。これは行政の基本的な「支援・サポート」で先述と同様の結果である。一方、住民参加型の活動は「公園に関する効果」のみならず、「地域住民の地域への愛着行動」「地域の環境保全活動等の活性化」「地域の多様な主体の交流」等の「地域への波及効果」が得られた。活動の「継続性」に向けたインセンティブ付与の効果は、本研究に示唆を与える論述がみられる。具体的なインセンティブとして、本研究に有用な項目を羅列しておきたい。それは、「ボランティア保険の加入」「安全管理」「活動に必要な経費の付与」、活動する個人や団体へ「表彰制度」「イベントの企画・開催」「技術の向上」「活動館の交流」「講習の提供」、のぼりや活動着の提供など「活動の統一感を出すものの提供」、HPや広報誌、掲示板等を用いた「活動報告の提供の機会」等である。また、住民が「地域を考える場の機会」や「社会貢献の場の提供」、さらには「専門家、有識者等の支援である『人的支援』」、他の団体、行政職員、企業の主体が集まり、地域課題等の「WSの企画・開催」なども地域への波及効果が相対的に大きいインセンティブである。しかしこれらは、行政の負担が大きいことに留意が必要である。

最後に、学生ボランティア活動のイメージ分析を参加者と不参加者動機の分析や、インセンティブ分析なども多数みられる（田尾2001、塩津・米崎2013、荒井2016、福井ら2021）。齊藤 (2019) は、活動へ関心や意欲があるが実際には活動を行っていない「潜在

的ボランティア層」に着目し、どのような条件設定や環境を整備すれば活動へ一歩踏み出せるか、原理モデルを提示した。また、齊藤（2020）は、ソーシャルな活動に取り組む地域人材を参画に誘う仕組みを検討した。地域人材の心と支えとスモールステップの必要性に言及した。支えとは、市民の思いや願いを汲み取った「あたたかい眼差し」や「声掛け」、「地域の未来の姿」を共に描くこと、個人（住民）と組織（NPOや行政）が相互に行き交う「つなぎ」の仕組みを創り出すことである。

### 3. ソーシャル活動を創り出す事業：「かながわユースフォーラム」を例に

本研究では、学生に限定した「ソーシャル活動を創り出す事業」の活動事例から、ソーシャル活動につながるインセンティブを明らかにしたい。

#### (1) 「全国学生ボランティアフォーラム」の変遷（2000年～）

学生のソーシャルな活動、ボランティア活動の活性化を促す事業として、「全国学生ボランティアフォーラム」（「学生フォーラム」と略記）がある。

1998年に文部科学省の外郭団体（財）内外学生センター（現（独）日本学生支援機構）は、全国に先駆けて1997年に「学生ボランティア活動促進に関する調査」の研究を開始した。その際、学生や教職員向けガイドブックを発行すると共に、大学関係者を対象にした研修セミナーを開催した。2000年に「全国の学生相談所にボランティア情報コーナー」設置と「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議会の集い」を実施した（機構HP参照）。

「学生フォーラム」の主催は、2013年から（独）国立青少年教育振興機構に継承された。「学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会（学生ボランフォーラム）」の事業は、2013～2018年まで6年間実施した。2018年にはボランティアに関心を持つ学生約900人が東京都渋谷区に集結した。同事業は、学生主体を基本に、地域・社会の課題解決に関するテーマ設定と企画運営を行う特徴を持つ。「学生フォーラム」に参加する学生は、2つのタイプに分かれる。まず参画型の学生は、企画から当日の運営まで、主体者として事業の推進を行う。事業の無償スタッフの位置づけとなる。次に参加型の学生は、当日のみ「学生フォーラム」に参加する客体となった。事業では機構スタッフに加え、参画型の学生に対して専門的見地から助言指導を行う支援者を配置した。支援者は、学生の伴奏的な支援を行う重要な役割を担った（齊藤は2015～2018年まで支援者委員）。

このように「学生フォーラム」は、学生ボランティアの活動報告や学生間の交流の機会など、ボランティア行動へのインセンティブを高める重要な機能であった。しかし、「学生フォーラム」は2018年に終了し、学生団体に引き継がれた。2019年に東京都世田谷区で「せたがや学生ボランティアフォーラム」の実施など地域独自の取組へ変容した。

#### (2) 「かながわユースフォーラム」の概要（2020～2023年）

上記の「学生フォーラム」の支援方法から学び、神奈川をフィールドとした「かながわユースフォーラム」（以下「フォーラム」）のCBL独自事業を開始した。

##### ① 「かながわユースフォーラム2020」の立上げ

「かながわユースフォーラム」は、「地域活動へのハードルを下げたい」と願う学生有志5名が集結し、2019年9月から週1の会議を重ねた。筆者の1人である2020年度代表の

中島さえによれば、学生らが解決したい地域課題は次の4点であった。「①地域活動に興味を持っていても、実際に参加する若者は少ない。②活動の担い手の高齢化や固定化している。③新しい出会いや地域活動を求める若者が多い。④地域活動に関する情報不足」である。さらに、若者が地域で活動する段階を設定した。それは、「知る」「考える」「交流する」「かかわる」の4段階である。これら相互に組み合わせた活動プログラムを練り上げた。

それは、地域で活動することの面白さを「知りたい」、地域課題を「考えたい」、参加者同士が「交流したい」、地域に踏み出し「かかわりたい」という、インセンティブの創出に向けた学生らの願いと意志表明でもあった。この思いや願いは、次年度に継承した。

## ② 「かながわユースフォーラム」の意義と参画力育成

「かながわユースフォーラム」は、「ユース（若者）が主体となって、ローカルな社会課題に向き合い、実践を介して課題解決の糸口を見つけ、その成果を協議する『若者参画型交流事業』である」。ユースは、大学生や高校生を対象とする。

ユースには、「参加者」と「参画者」が存在する。一般に参加は「行事や会合に加わること」に対し、参画は「計画立案に加わること」を指す。「参画者」は、ユース自身が企画や運営プロセスを体験的に行う参画型学習を通じて、「参画力」の育成を意図する。参画型学習では、「一人ひとりの動機付けを大事にして、自発的参加を促し、体験を重視したグループ力動性を活用した学び」を重視する（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター 2001）。したがって、ユース自身が、様々な地域課題を見つけ出し、テーマに基づき協議を行う、ヨコの関係を重視した相互交流型の事業となる。

## ③ ユースの参加者・参画者

同事業では、参加・参画するユースの階層がある（図1）。A参画層（事業テーマの設定をはじめ、企画・運営・評価の全てを1年間かけて実施する）、B参画者（分科会等の企画・運営・評価を行う）、C参画層（既に活動を経験した「学生アドバイザー」が、初めて取り組む学生に助言と伴走支援を行う）、D参加層（当日参加を行う潜在層。参加後

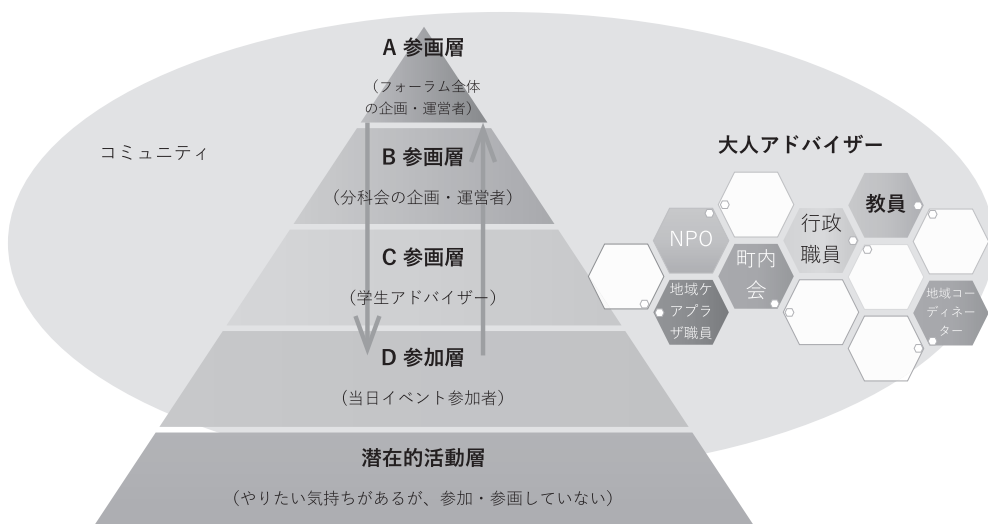


図1 「かながわユースフォーラム」におけるユースの参加層・参画層の構造

に何らかのソーシャル活動に関与し、次のフォーラム参画層になる可能性もある)。

A～Dまでユース全体をフォローするのが「大人アドバイザー」である。「口出ししない」「アドバイスのみ」「温かい眼差し」の前提条件で、ユースの事業運営の伴奏者となる。

2023年現在、上記のA参画層は、主に神奈川大学社会教育課程の学生らが、「地域デザイン演習Ⅲ」の授業の一環で取組む。「大人アドバイザー」は、同大の教員・地域コーディネーター・地域人（ボランティア）が担う。

#### ④ プログラム概要と変容

これまで実施してきた2020～2023年度までの4回のプログラム概要を表1に示した。

表1 かながわユースフォーラムのプログラム概要

	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
運営主体	「かながわユースフォーラム実行委員会」（神奈川大学社会教育課程・学生有志）			
テーマ	一歩踏み出す広がる未来	若者と歩む地域の未来	地域に「輪」を拓ける	人の「和」をつなげよう
目的	①地域活動を知る。②地域課題を自分事として考える。③参加者同士や参加者と地域で活動する人が交流する。④地域に若者が関わることの促進	地域との交流が減った若者（ユース）を対象に、コロナ禍における地域の課題を探り、若者と地域の「希望」を見出す	新たな出会い・考え方・経験をしたい若者の希望に対するして、「成長支援」、「地域社会との交流推進」、「潜在的活動層への支援」を行う	「人の和」は、対立のない和やかな協力関係を目指す。コロナ禍で薄れた人と人とのつながりを、新たな視点で再構築し、「人の和」を学生の力でつなげる
運営時期	2019年9月～2020年12月	2021年1月～2021年12月	2022年2月～2022年12月	2023年2月～2023年12月
運営者（学生アドバイザー）	8人	29人（うち、学生アドバイザー10人）	31人（うち、学生アドバイザー6人）	20人（うち、学生アドバイザー5人程度）
支援者（大人アドバイザー）	7人	8人	8人	6人
活動空間	横浜市神奈川区	横浜市神奈川区	横浜市神奈川区・西区	横浜市神奈川区
活動内容	地域・社会課題のテーマに基づいた講座の企画運営	地域・社会課題のテーマに基づいた講座の企画運営と地域活動への参加	地域課題をテーマとする事業実施後、フォーラムで報告会。「商店街にポニー」「子どもアドベンチャーカレッジ」「斎南町でヒューマンライブラリー」「子どもスポーツ等」等のイベント企画。	地域課題をテーマとする事業実施後、社会課題を共に考える講座の企画。「町内会×食×防災」、「高齢者×地域×コミュニティ」など。
参画者（企画運営）	神奈川大学資格教育課程センター・社会教育課程、選択科目「地域デザイン演習Ⅳ」他			
地域連携先	【官】横浜市神奈川区、【民】神奈川区社会福祉協議会・ボランティアセンター（区社協と略記）、六角橋地域ケアプラザ、NPO法人アクションポート横浜、	【官】横浜市神奈川区、【民】神奈川区社協、片倉三枚・六角橋地域ケアプラザ、六角橋商店街連合会、NPO法人アクションポート横浜、ふれあいっこ三ツ沢	【官】横浜市教育委員会、神奈川区、【民】神奈川区社協、六角橋商店街連合会、斎南分町南部町内会、神大寺学童クラブ、NPO法人アクションポート横浜、（公財）ハーモニーセンター、さわやか福祉財団	【官】横浜市、神奈川区、小田原市、戸塚警察署、【民】区社協、六角橋地域ケアプラザ、斎藤分町南部町内会、NPO法人グッド、地域子育て支援拠点かなーちえ、日本ヒューマンライブラリー協会、【学】横浜市立東高等学校、近隣中学校、【産】神奈川ロータリークラブ、六角橋商店街連合会
行政等の関与、補助金	横浜市神奈川区「かながわ地域支援補助金支援事業（スタートアップコース）」の補助		同区補助金、（公財）さわやか福祉財団による助成金	なし
参画者（イベント参加）				
プログラム	全大会、分科会(6)、リフレクション	全大会、分科会(5)、リフレクション	全大会、分科会(7)、リフレクション	全大会、分科会(6)、パネル展示(8)、リフレクション
分科会テーマ	子ども、多文化共生、ジェンダー、災害、多世代交流、スポーツ、子どもスポーツ他	高齢者、祭り、商店街、子ども、ジェンダー	商店会と子ども、子どもと企業、町内会と若者、子どもとスポーツ、子どもとエコ、ジェンダー、中学生の学習支援	町内会、コミュニティカフェ（高齢者）、中学生の学習支援、オレオレ詐欺、ジェンダー、国際ワークキャンプ
実施日時	2020年7月18日（土）13時～16時	2021年6月26日（土）9時30分～12時30分	2022年7月9日（土）13時～16時	2023年7月1日（土）13時～16時30分
場所・方法	オンライン（Zoom）	オンライン（Zoom）	神奈川大学・対面	神奈川大学・対面
参画学生	36人	37人	44人	50人
参加学生	141人（参画者含む）	160人（参画者含む）	274人（参画者含む）	354人（参画者含む）
対象とした授業	社会教育課程の学生呼びかけ、「ゼミナール」等	社会教育課程の学生呼びかけ、「ゼミナール」等	教養科目「ボランティア活動論」「生涯学習論」	教養科目「ボランティア活動論」「生涯学習論」「体験型研修」「ボランティア学習論」「ゼミナール」等

注）2020年度～2023年度の「地域デザイン演習Ⅳ」の担当教員は長浜洋二（非常勤講師）、2024年度の担当教員は齊藤ゆか、寺嶋正尚



うち、2020～2021年度まではコロナ禍を経た故に、止む無くオンライン実施した。それでも、行政や地区社会福祉協議会をはじめ、地域ケアプラザ、NPO、ボランティア団体、地縁組織（町内会、主任児童委員）、学童クラブなどと地域連携の協力者は増大傾向にある。地域課題に応じたテーマとソーシャル活動が実質化された。各年で活動スタイルは異なるが、ユース参画者の活動力が、大学と地域とのソーシャルキャピタル醸成に好循環を与えている、と推測できる。

#### ⑤ 活動につながるインセンティブの創出

ソーシャル活動につながるインセンティブには、次の点に配慮した。第1は、ユースの「やりたい」という思いや願いを大事すること、第2は、ユースの「参加」から「参画」に昇華するプロセスを重視すること、第3は、地域の多様なステークホルダーと連携・協力した学びを創り出すこと、第4は、既に経験した学生アドバイザーが、新規参画学生をサポートすること、第5は、大人アドバイザーは、ユースの事業運営の伴走者となること、である。特に、「大人アドバイザー」と「学生アドバイザー」が重要な役割を担う。しかしながら、ソーシャル活動とインセンティブとの関連は未だ予測の域を出ていない。

## 4. 「かながわユースフォーラム2023」の効果の検証

### (1) 「かながわユースフォーラム2023」の概要

2023年度の「かながわユースフォーラム」は「人の『和』をつなげよう」をテーマ設定し、6つの分科会、8つのパネル展から構成される（表2）。

参加者は自らの興味・関心に基づき、このうち3つの取り組みを自由に選択し、学習した。3つの分科会に参加する者もあれば、2つの分科会及びパネル展に参加する者もある。

表2 「かながわユースフォーラム2023」のプログラムパターン

時間	内容	プログラム
13:00	開会式	開会・フォーラム趣旨説明・学年代表挨拶
		アイスブレイク(自己紹介等)
		全体・分科会の流れ説明
13:30	分科会	分科会・パネル見学①
		分科会・パネル見学②
		分科会・パネル見学③
15:40	閉会式	分科会振り返り
		アンケート記入
		学年代表挨拶
		全体写真撮影・閉会

分科会	パネル展テーマ
①町内会班「町内会×食×防災」	①横浜市立東高等学校 サステナブル研究部「高校生が 企業とコラボ」
②コミュニティカフェ班「高齢者×地域×コミュニティ」	②神奈川大学小田原みかんプロジェクト「廃棄みかんの活用」
③JIN-KANA 学習塾「大学生×子どもたちのコミュニティ」	③体験型研修（食育 わくわく体験）受講者「食と農の学び」
④寺嶋正尚ゼミ+武内千草ゼミ（産業能率大学）「高齢者×詐欺」（戸塚警察署プロジェクト）	④齊藤ゆかぜミ「子ども、スポーツ、地域貢献」
⑤荻野佳代子ゼミ「ジェンダー×スキンケア」	⑤神奈川県社会福祉協議会（ボランティアセンター）「ボランティアに行ってみよう」
⑥NPO法人グッド「海外ボランティア×大学生」	⑥川崎子ども夢パーク「自分らしくいられる子どもの遊び場」
	⑦ボランティア学習論（市川享子講師）「大学生が考えるボランティア」
	⑧神奈川大学学生ボランティア支援室「ボランティア相談コーナー」

## (2) 「かながわユースフォーラム2023」の参画者・参加者

参画者は、社会教育課程「地域デザイン演習（月曜4限）」（教員：齊藤・寺嶋）である。また、参加者は、教養科目「生涯学習論（月曜1限）」（教員：齊藤）、「ボランティア論（月曜2限）」（教員：齊藤・磯田）の履修者が大半を占め、1年生の履修が多い。なお両科目とも選択科目のため、一般学生よりボランティアや社会貢献などソーシャル活動に興味や意識が高い可能性がある点に留意が必要である。

## (3) 参加者の自由記述の分析方法

「かながわユースフォーラム2023」参加後に、その感想を尋ねた。自由記述回答である。その概要は表3に整理した。その情報を用いて、テキストマイニング分析を行った。分析方法は、樋口（2004, 2020）を参考にしている。

表3 データの概要

実施時期	: 2023年7月3日（月）
質問項目	: 「かながわユースフォーラム」に参加した感想
回答者数	: 158名（「ボランティア論」履修者200名のうち79%）
方 法	: google formsを活用

分析には、フリーソフトウェアであるKH Corderのコマンドを用いた。①頻出語分析、②共起ネットワーク分析、を行った。

KH Corderは、テキストマイニングの分析ツールとして、非常に多くの分野の論文で使用されている。本稿でも、「かながわユースフォーラム」に参加した感想に関し、①頻出語リストの作成、②出現パターンの似通った語、つまり共起の程度が強い語を線で結んだ「共起ネットワーク」の作成を行った。なお分析では、出現数により語の取捨選択を行った。最小出現数は20に、描いた描画数は60に設定した。本稿は白黒であるが、その濃淡はサブグラフ検出（modularity）に拠るものである。

表4は、頻出語ランキングである。「思う」「参加」「人」「ボランティア」「自分」「活動」「感じる」「考える」といった用語が上位に入った。今回の「かながわユースフォーラム」に参加することを通じて、ボランティア、自分自身、活動等について思いをはせ、考える機会を得たであろうことが推測される。

図2は、「かながわユースフォーラム」に参加した感想に関する、頻出語の共起関係を示したもの（共起ネットワーク）である。全部で10のグループが検出された。

このうち、グループ2はジェンダー問題を扱った分科会、グループ3は学習支援を扱った分科会（JINKANA学習塾）、グループ4はオレオレ詐欺を扱った分科会、グループ5はまちの防災を扱った分科会、グループ6はパネル展全体、グループ7はコミュニケーションカフェ、グループ10は「古着によりワクチンを貧しい地域に提供しよう」と言うパネル展の中の1つの内容、と言うように、実際の「かながわユースフォーラム」のコンテンツに関するものである。

一方、1, 8, 9のグループは、今回の取り組みの純粋な感想である。グループ8は「印象」「残る」、グループ9は「興味」「持つ」と、それぞれ2語のみとなっており、最小出現数20の条件下においては、目的語に該当するワードが上がってこない。このため、主

表4 「かながわユースフォーラム 2023」の感想に関する頻出語

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	思う	606	51	神奈川	68	101	他	41
2	参加	518	52	場所	67	102	被害	41
3	人	453	53	良い	67	103	コミュニケーション	40
4	ボランティア	413	54	作る	64	104	ワーク	40
5	自分	407	55	話す	63	105	取り組み	40
6	活動	339	56	経験	60	106	中学生	40
7	感じる	283	57	たくさん	59	107	スリランカ	39
8	考える	278	58	印象	59	108	気	39
9	ユースフォーラム	263	59	問題	59	109	班	39
10	聞く	232	60	災害	58	110	理解	39
11	知る	216	61	勉強	58	111	授業	38
12	地域	205	62	高齢	57	112	大学	38
13	今回	180	63	対策	57	113	面白い	38
14	詐欺	178	64	非常	57	114	止め	37
15	海外	165	65	イベント	56	115	社会	37
16	展示	164	66	言う	55	116	新しい	37
17	パネル	161	67	お話	54	117	神奈川大学	37
18	グループ	158	68	使う	54	118	水	37
19	話	158	69	少し	54	119	先輩	36
20	カフェ	148	70	発表	54	120	得る	36
21	分科	145	71	教える	53	121	自身	35
22	行く	125	72	特に	53	122	場	35
23	コミュニティ	117	73	最後	50	123	身近	35
24	意見	115	74	町	50	124	積極	35
25	ジェンダー	111	75	違う	49	125	前	35
26	見る	110	76	関わる	49	126	改めて	34
27	日傘	109	77	体験	49	127	クール	33
28	持つ	105	78	方々	49	128	関係	33
29	学生	102	79	行動	48	129	子ども	33
30	学習	101	80	普段	48	130	世代	33
31	多い	101	81	驚く	47	131	分かる	33
32	行う	97	82	考え	47	132	スキ	32
33	塾	97	83	最初	47	133	若者	32
34	興味	95	84	出る	47	134	食料	32
35	出来る	94	85	女性	47	135	素晴らしい	32
36	楽しい	91	86	学校	46	136	理由	32
37	防災	90	87	色々	46	137	運営	30
38	必要	88	88	説明	46	138	考え方	30
39	機会	86	89	生活	45	139	男女	29
40	学ぶ	82	90	多く	45	140	一緒	28
41	実際	82	91	内容	45	141	古着	28
42	男性	81	92	企画	44	142	視点	28
43	様々	79	93	残る	43	143	増える	28
44	大切	77	94	使用	43	144	いろいろ	27
45	子供	73	95	話し合う	43	145	ゼミ	27
46	大学生	73	96	JIN-KANA	42	146	価値	27
47	時間	71	97	意識	42	147	思える	27
48	日焼け	69	98	初めて	42	148	出す	27
49	交流	68	99	イメージ	41	149	生徒	27
50	今	68	100	ケア	41	150	団体	27

として1のグループが感想について深く記述したものと言える。なおグループ1には、「海外」「ボランティア」という関係性も内包されるが、これは分科会の中の1つである「海外ボランティア」に関するものである。

そこで以下、このグループ1について深掘りして考察することにしよう。前述した表2



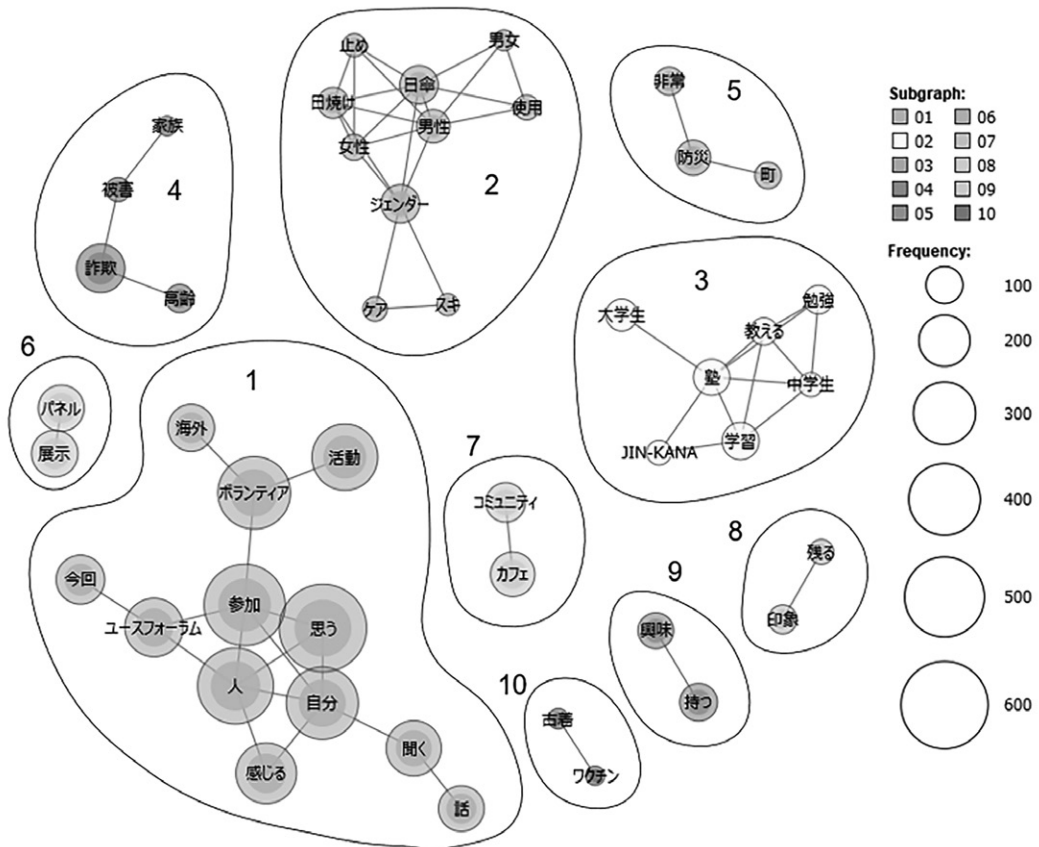


図2 「かながわユースフォーラム」の感想に関する頻出語の共起関係（共起ネットワーク）

における網掛けの部分（「海外」を除いたもの）は、この1のグループの構成要素である。グループ1の頻出語の上位に数多くランクインしていることが分かる。

グループ1におけるコメントの中心的なワードである「参加」に関しては、表4に示したように518回出現するが、そのうち今回の「かながわユースフォーラム」に参加することで、なんらかの気付きや今後の活動の指針を得たとする意見を紹介したい。

表5に示したが、「かながわユースフォーラム」を契機に、ボランティア活動に参加してみたいと思うようになったとするもの、来年は参加者ではなく運営者（参画者）として関わりたいとするもの、海外ボランティアなど個別のボランティアに参加したいとするものなど、実に様々なコメントが見受けられる。ボランティアに関する様々な情報は、今回の参加者が履修する「ボランティア論」等を通じて十分情報提供されてきたにも関わらず、学生主体の「かながわユースフォーラム」により、学生により大きなボランティアに対する関心を惹起させ、またインセンティブを与えたことが分かるだろう。

表5 「かながわユースフォーラム」を介して、「参加」意向を示す内容（感想一部）

食育の取り組みや SDGs, 地域交流などさまざまな活動やボランティアがあることを知って, 私も	参加	してみたいと思いました。
私は, 社会教育課程を取得することを考えていたので, このようなイベントに	参加	できて良かったと感じました。
これを機により興味を持ち, タイミングがあれば, このような場に	参加	してみたい。そしてかながわユースフォーラムに関わることが出来るタイミングがあれば, 来年催す側として
かながわユースフォーラムに関わることが出来るタイミングがあれば, 来年催す側として	参加	してみたい。
◇授業の一環で参加する事になったが大学に入ってこういったイベントに初めて	参加	したのでとても新鮮で楽しかった。
自分も将来なにかやってみたいと思う。私は, 今回かながわユースフォーラムに	参加	してとてもいい経験ができたと思う。私は, たくさんの方々のボランティア活動のお話を
神奈川ユースフォーラムに	参加	してみて, もっとボランティアに参加したいなと強く思いました。
今後は, かながわユースフォーラムを	参加	する側ではなく, 企画・運営する側として活動していきたいと思いました。
自分の考えなどを変えてくれたことに感謝しています。また来年もあるなら	参加	しようと思います。
私はボランティアにもっと	参加	してみたいとユースフォーラムの方々の体験談を聞き, おもいました。
かながわユースフォーラムに	参加	したことは自分の無知を知ることができるきっかけとなった。私は社会教育士の資格
今回初めてかながわユースフォーラムに	参加	して, たくさんの学びと気づきがありました。
こういう活動に	参加	したことはなかったけど, これなら自分でも少しやってみたいなと思いました。
神奈川ユースフォーラムに	参加	してみて, 神大生の先輩がたくさん携わっていることに驚きました。どの先輩も,
GOOD の海外ボランティアキャンプに	参加	した人の体験談はとても魅力的だった。
今回の神奈川ユースフォーラムに	参加	して, 前に立っている生徒の方々がとても活気良く接してくれてとても楽しかったです。
斎藤分南部町内会館さんがおこなっているモスキートバスターズの話を聞き, 是非とも来年	参加	したいと思った。
今後もユースフォーラムの活動を是非続けてほしい。来年はボランティア支援室の一員として	参加	したいと思う。
神奈川ユースフォーラムに	参加	して, 自分を見つめ直すことができた。
神奈川ユースフォーラムに	参加	してみて, 様々なことを考えさせられました。
海外でのボランティア活動は大変そうというイメージが少し和らいだ。機会があれば私も	参加	してみようかなと思った。
私もその姿勢を見習いたいと思った。今回	参加	したユースフォーラムで学んだことは今後活きると思うので, 忘れないようにしたいと思う。
今回のかながわユースフォーラムに	参加	して思ったことは, 学生主体の活動だったが, わかりやすい説明や, 場を盛り上げよう
私は神奈川ユースフォーラムに	参加	してたくさんのことを学ぶことができました。
これを機に, 私も積極的にボランティア活動に	参加	していきたいです。
今回のかながわユースフォーラムに	参加	したことを通じ, 沢山の新たな学びと考えることが出来た。
私はこの手のイベントの運営に回ることが好きなので, 来年度以降	参加	へ興味と関心を持ったことや, 今回のイベントはおそらくボランティア論の授業を履修してなければ
このイベントに	参加	しなければこのような学生と地域の活動自体知らないままだったと思う。
地域の人と協力して頑張っている事を知り, 見て自分も何か地域の活動に	参加	したい気持ちになった。この気持ちを「新たな経験」に繋げられるよう自分の地元でも
, 自己成長を実感することができました。今後もこのような機会に積極的に	参加	し, 自分の能力を高めながら社会貢献できるような人になりたいと思いました。
考えを大きく変えてくれたと思う機会になりました。今回のような会にまた	参加	したいと強く思うとともに今回学んだことを忘れずにこれからの大学生活に取り入れて実践して

## 5. まとめ

本稿は、大学と地域・社会をつなぐ教育支援手法の開発と評価構造を解明するため、その一歩として、ソーシャル活動につながるインセンティブの検討を行うことを目的とした。

その結果、テキストマイニング分析から、「思う」「参加」「人」「ボランティア」「自分」「活動」「感じる」「考える」の用語が上位となった。これは、2020年に企画立案した学生らのインセンティブ付きプログラム（「知る」「考える」「交流する」「かかわる」）との一致点が確認できる。つまり、大学と地域・社会がつなぐCLC事業「かながわユースフォーラム」の企画・実施は、ソーシャル活動に「参画したい」「参加したい」ものにとって、有効な「インセンティブ付与」といえるだろう。こうした事業は、地域への波及効果が相対的に高まるものと考えられる。インセンティブプログラムになり得るには、多様な学びのコンテンツの提示が、参加者の関心の惹起に役立つことが明らかになった。今後、参画者の意識高揚にあたって、学生間、学部・学年間、学生と地域間の関係性を強めるインセンティブの設定には、「交流機会」が有効となることが参与観察から散見された。しかし、事業の継続にあたり、実施運営にむけた時間や労力など「負担の大きさ」や「経営的インセンティブの欠如」などは、「モチベーションの維持を阻害する要因」となる点は、唐崎ら（2009）や伊藤・市村（2017）と同様の結果といえる。しかしこうした課題は、本稿の分析から検証されてはいない。

「地域再生の拠点としての大学の地域機能強化」については、2012年より「高等教育の抜本的改革」（文科省）を推進した。2006年教育基本法改正以降、大学の使命（役割）に「社会貢献」が明文化されたことは、各大学と産学官民との連携強化の促進に結実した。「地域連携」「地域貢献」に関する研究は、その実態、継続の効果性や課題など多数の報告がされている。産学連携・地域連携とインセンティブ構造にあたり、「積極的に地域に関わろうとする研究者ほど負担が増えていく」「長期的には地域貢献活動に対するインセンティブは低下せざるをえない」「大学教員の活動を俯瞰的に把握・評価するために必要な政策的議論の枠組みが欠けている」等の厳しい指摘もある（渡部2016、鈴木ら2021）が、これらは稿を改めたい。

本稿の主題である、ソーシャル活動につながるインセンティブを、持続可能な教育支援として実質化するには、次の研究課題が挙げられる。

第一に、本稿では事業やプログラムの分析は行ったが、大学と地域・社会をつなぐ地学連携には、インセンティブ付与の大学環境の整備と設計を包含的に捉える研究が必要である。唐崎ら（2009）を参考にインセンティブには「実現の場（モチベーションを満たす機会、空間等）」、「社会関係（組織、人間関係等）」、「報酬（金銭、特典等）」等の3要素があるが、とりわけ、場と社会関係は学内だけでなく、学外の地域（行政、地縁組織・NPO、企業等）との関係性が見える化し、誰もがアクセスできる情報提供などが求められる。それは、例えば「誰が」「いつ」「どこで」地域の活動が行われているか、という潜在層の声に応えるものである。こうした、地域連携の見える化によって、流動化する学生（潜在層）がソーシャルな活動に行動移行する、外的環境の整備（インセンティブ）に結びつくことが期待できる。

第二に、参加者や参画者、不参加の特性の相違を明らかにし、参画者や参画者に向けた

多様な活動コンテンツと成長実感できる評価開発を進めることである。参加・参画を希望する人々が、最も効果的なインセンティブ付与条件を検討することで、「インセンティブプログラムを計画する際の重点対象者にあわせて選択すること」ができる(松下ら2017)。

第三に、ソーシャル活動の受入「協力者」の開拓と、「参加者(体験者・来訪者)」「参画者(運営者)」「協力者(地域人)」「支援者(教員・事務職員等)」の役割分担と「関係者相互のインセンティブの模式化」が必要なことである。先行研究によれば「金銭的インセンティブ」が最も有効とされたが、本当にそれだけなのか。人々の地域関与によって、共に味わう喜びや成長、地域変容する実感や経験など、非金銭的インセンティブを解明したい。

最後に、大学と地域・社会をつなぐ人材確保と人材育成の開発研究することである。既に、本学社会教育課程では「ソーシャルコーディネーター」育成のカリキュラム改編や「地域コーディネーター」等の配置を進めた。しかしながら、そうした「コーディネーター」暗黙知の技術分析や教材開発は未開拓である。

これから、大学と地域社会と連携したイノベーション創出にむけて、関係者間でインセンティブが相互に機能化する方向性を検討し続けていきたい。

本研究の事例となった「かながわユースフォーラム」の実施運営にあたり、行政や地域の多数の方々に大変お世話になりました。2020年度から長浜洋二先生(モジョコンサルティング合同会社代表)や高城芳之先生(NPO法人アクションポート横浜の代表理事)の学生指導を賜りました。研究分析にあたり、情報社会学の専門家である白土由佳先生(文教大学情報学部)にご助言を頂きました。心から感謝申し上げます。

## <引用文献>

- 荒井俊行(2016)「大学生のボランティア活動へのイメージが参加者志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響」『日本教育工学会論文誌』40(2), 85-94.
- 伊藤大志, 市村恒士(2017)「都市公園における住民参加型の維持管理活動に対する行政のインセンティブ付与の現状」『ランドスケープ研究』80(5), 509-514.
- 岡本翔平, 駒村康平, 田辺解, 横山典子, 塚尾晶子, 千々木祥子, 久野譜也(2017)「インセンティブ付き健康づくり事業参加者のうち、誰がプログラムを継続できないか: 報奨獲得への動機と継続率に関する実証研究」『日本公衆衛生雑誌』64(8), 412-421.
- 唐崎卓也, 安中誠司, 木下勇(2009)「農業・農村体験活動への参加モチベーションとインセンティブ」『日本造園学会』72(5), 835-840.
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター(2001)「学習プログラム立案の技術」
- 塩津ゆりか, 米崎克彦(2013)「コミュニティ活動への参加誘因分析」『経済学論叢』65(1), 261-272.
- 齊藤ゆか(2019)『『潜在的ボランティア』が活動に踏み出す条件設定と環境づくり』『生活経営学部会』第54号, 50-59.

- 齊藤ゆか (2020) 「地域人材を生かすソーシャルビジネス：人材育成・活用と組織活性化の視点から」『都市とガバナンス』34, 27-35.
- 齊藤ゆか (2022) 『ボランティア評価学: CUDBAS を用いた評価指標の設定と体系化』ミネルヴァ書房.
- 鈴木千賀, 吉用武史, 受田浩之, 竹村明洋, 西川一弘, 藤川清史, 松本拓郎, 中川尚志, 行武晋一, 石田実 (2021) 「水産海洋系大学研究者の産学連携とインセンティブ構造に関する研究①」『Studies in Science and Technology』10(2), 151-160.
- 田尾雅夫 (2001) 「ボランティア活動を支える心理：インセンティブを中心に考える」『生活協同組合研究』(303) 12-17.
- 千々木祥子, 田邊解, 塚尾晶子, 久野譜也 (2023) 「事業参加前に運動を行っていない地域住民が選好する金銭的インセンティブの種類：インセンティブ付き健康づくり事業を実施する6自治体での検証」『体力科学』72(2), 53-159.
- 寺嶋正尚, 都留信行, 武内千草 (2019) 「東急線・副都心線沿線の主要都市の来街頻度に関する分析」『産業能率大学紀要』40(1), 1-16.
- 樋口耕一 (2004) 「テキスト型データの計量的分析 — 2つのアプローチの峻別と統合 —」『理論と方法』(数理社会学会) 19(1), 101-115.
- 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析 — 内容分析の継承と発展を目指して — 第2版』ナカニシヤ出版.
- 松下宗洋, 原田和弘, 荒尾孝 (2017) 「身体活動量増加の動機づけに効果的なインセンティブプログラム：コンジョイント分析」『日本公衆衛生雑誌』64 (4), 197-206.
- 福井秀樹, 青木理奈, 石坂晋哉 (2021) 「学生ボランティア活動のインセンティブ先行研究の概観と試行フィールド実験からの教訓-」『大学教育実践ジャーナル』19.65-72.
- 渡部岳陽 (2016) 「大学研究者が地域貢献活動へ関わる意義と課題」『農村経済研究』34 (1), 33-39.